

2013年12月 第12号



日本学校心理士会東京支部

## 巻頭言 個と環境に働きかける学校心理士

東京支部支部長 芳賀 明子

学校心理士の社会的な知名度は上がってきているとはいうものの、実際に活動する場を得ることは十分とは言えません。更に学校心理士が活躍できるようになるまでには、学校心理士について多くの方に知っていただけるような、個々の会員の日常的な活動が重要になると思います。

学校心理士会においては、個々の会員の方の活動を支えるための活動がますます重要になっています。支部単位での活動の機会は多くは作れませんが、東京支部では、年3回の研修会を定期的に関くことに力を尽くしています。同時に、各ブロックが研修・研究の機会を作って地道に進めておられます。こうした地道な取り組みが学校心理士の知名度につながっていくものと思います。

毎年、支部研修会を計画するたびに、「個別の心理的な問題解決のために心理臨床としての側面に関する内容を色濃く打ち出す」のか、「環境すなわち学校で行われている様々な教育活動（例えば授業や生徒指導）の中での問題解決についての基盤づくりを重視していく」のかという2点を考えます。

学校心理士は、児童生徒の学校（という環境）とのかかわりにおける心理的な側面に対して、学校という「場」において支援を行うことを専門とする資格であると思います。ですから「学校」を深く理解し、その中で個と環境の両面から問題の解決に力を発揮することが、役割であると思います。

文部科学省は、「開かれた生徒指導」、「情報連携から行動連携へ」と生徒指導の方向を示しています。「開かれた生徒指導」のために学校心理士はどのように機能することが必要なのでしょうか。学校心理士は、学校というコミュニティ、学校を取り巻くさまざまなコミュニティを理解して、すなわち個と環境の両面の理解にたつてその両面に働きかけることがその役割であると考えます。そのためには、コミュニティの意味とそれぞれのコミュニティの特質の理解をもち、どこの誰に何をどのように開いていくことによって連携を進められるのかを見極める力量が求められます。個別の心理的理解とコミュニティ・環境の理解の両面について研鑽を重ねていくことが重要です。

学校という「場」が子どもの支援の場として機能できるように、そのために会員相互の連携の編み目を細かく編んで学校心理士の活動の場が広がるように、みなさん力を合わせていきましょう。

## 学校心理士の具体的な取り組みの進め方

2013年3月9日に東京都文京区の茗溪会館において、学校心理士東京支部第3回研修会が開かれました。昨年度の研究テーマであった「学級の子どもへの援助の具体化を考える」が提示され、学校心理士としての原点回帰を目標にその集大成の研修となりました。

講演は、学校心理士会会長、東京支部顧問石隈利紀先生が、「学校と学校心理士 ～具体的な取り組みの進め方～」という主題で、学校現場における学校心理士のあり方を中心に具体的な活動についてのお話をしてくださいました。講演内容は8つの小題に分けられ、学校心理士が学校の様々な場面における取り組みにおいて大切な点を和ませて下さるお話を交えながら詳しく進めてくださいました。

一つ目は、学校はサービスの場であることと、教育サービスにおける学校心理士の在り方について、二つ目は、学校は日常生活の場であり、その維持と向上を支えることの重要性について、三つ目は、学校はみんなが学ぶ場所であり、発達障害のある子どもを含めた子どものニーズに応じた心理教育的サービスが必要であることについて、四つ目は、学校と保護者の対等性、学校心理士と保護者の相互コンサルテーションについて、五つ目は、子どものニーズとアセスメントの焦点が子どもの問題解決につながることに ついて、六つ目は、チーム援助のコーディネーションについて、七つ目は、実践研究におけるエビデンスの積み重ねの必要性について、八つ目は、学校心理士の更なる活躍の場の紹介について、といずれも教育現場における学校心理士の役割とチーム援助を目指すための重要なポイントをお話してくださいました。私たちが学校心理士として子どもの将来を考え、また援助資源から最善の環境を整えて変えていくことができる担い手であることを改めて実感させていただきました。

しかし、子どものニーズは十人十色であり、それを支える環境、資源においてもその時々で異なることが多いと思います。だからこそ学校心理士として、教育現場を踏まえた活動を理論と実践を両立させながら実証していくことが求められるのだと考えます。このためにも学校心理士としてより多くの子ども達の将来のために活躍できる場を増やせるよう心理職の国家資格化は急務と言えるでしょう。

講演の最後には、心理職の国家資格化のため会場に集まっていた皆様に「心理師」推進のための署名をしていただきました。また、署名用紙を配布し周囲の方々にも理解と協力を呼びかけさせていただきました。今回の署名活動が、一日も早い国家資格化につながることを期待しております。ご署名いただいた方皆様、ご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。



## 研 修 会 報 告

### <はじめに>

今年度の研究テーマは「コミュニティ・アプローチを学ぶ コミュニティ・アプローチと学校心理士の関わり」です。学校、学級で起こる様々な課題を限定された場面だけを見るのではなく、環境調整という視点を含め多角的に対応していくことが求められています。このようなときにコミュニティ・アプローチという取り組み方は重要性を持ちます。

このようなことから、今年度の研修を進めています。

### <報告>

①平成25年6月1日(土)

「学校におけるコミュニティ・アプローチ —基本的考え方とその応用—

上智大学総合人間科学部心理学科  
教授 久田 満先生

会場 林野会館 14:00～16:00

久田先生は、まず「コミュニティ」の概念定義、「コミュニティ心理学」の基本理念についての説明をしてくださいました。そして、19世紀の公衆衛生運動などを例に挙げながら、予防的対応の利点について述べられました。地域へのアプローチとしての一次予防では、「地域の精神保健センターにおける両親学級」「子育て支援事業」など、二次予防では「乳幼児に対する集団検診」「健康診断時のメンタルヘルスチェック」など、三次予防では「病院と家庭との間の橋渡しとなる場の確保」「セルフヘルプグループなどの自助活動」などがあり、予防プログラムの実施が重要であることを指摘されました。

さらに「危機理論と危機介入」の課題にも触れ、「危機状態」とは「個人だけでなく、家族や集団、組織（学校、企業など）、地域社会などのシステムとしてのコミュニティにおいても同様」であり、

「安定した習慣、平衡状態を打ち破ることは、不安を伴い危険でもあるが、新しい対処方式、問題解決方法を取り入れて新しい発展を促すことが可能となる」と述べられ、「成長促進可能性 (growth promoting potential)」の観点も示されました。

そして、「コンサルテーション」についてはコミュニティ心理学では重要な鍵概念であることを示され、カウンセリングとの相違点などについてもご説明いただきました。

最後に、「コミュニティ・アプローチの発想」として、「待つ姿勢 (waiting-mode) から探求する姿勢 (seeking-mode) へ」と述べられ、「援助は、それを探し求めている人々に対してだけでなく、最も必要としている人々に利用できるものでなければならない」と述べられました。

学校心理士の取り組むべき方向性を示す講演をしていただきました。

②平成25年10月19日(土)

「子どもの成長を支える連携

—コミュニティ・アプローチの実際—

埼玉大学教育学部

教授 沢崎 俊之先生

会場 林野会館 14:00～16:00

沢崎先生は、研修会の始まりを参加者対象のワークから行われました。和やかな雰囲気を作られてから、コミュニティ・アプローチのキーワードとして、子どもの成長には「生涯発達」「アサーション」、連携では「学校・家庭・地域」「学校を核としたコミュニティづくり」「生涯学習」を示されました。

そして、子どもの成長には「子どもの成長をとらえる視点」が求められるとの指摘から「生涯発達」「自他尊重」という観点を示されました。また、「環境のなかの子ども／大人の役割」として、家庭・学校・地域に目を向けること、学校を核としたコミュニティづくりが重要で

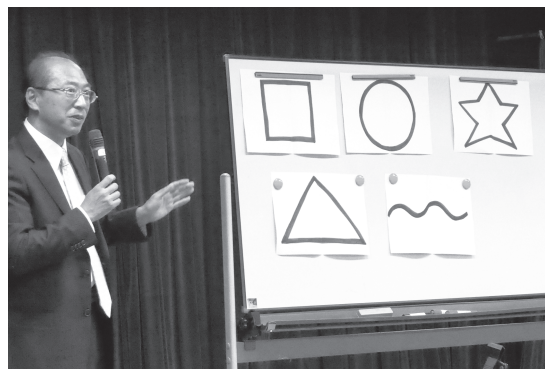


あることを述べられました。

具体的な事例として、A地区B小学校PTA・学校地域応援団の「子どもを犯罪から守るまちづくり」活動の紹介をしていただきました。その他の実践として、「児童虐待予防 全国地域活動連絡協議会『心のつぶやき』」や「中学生生徒会交流サミット」などもお話しいただきました。

このような活動の中から、開発的・予防的カウンセリングのひとつとしてのアサーション・トレーニングの学校教育への導入に関する研究に取り組んでこられた先生のお考えを学ぶことができました。そして、アサーションの定義は「自分の考え、欲求、気持、気分などを正直に、率直に、その場の状況にあった適切な方法で述べること」であり、「相互交流の中でお互いの変化や歩み寄りのプロセスを重視すること、『心の通う人間関係を築く』というのは、『ゴール』ではなく、その時、その時で、変化しつつ築き続けるものである」と示されています。(2013-2 心とからだの健康9 私の提言)

コミュニティ・アプローチにおける具体性と方向性を学ぶ研修会となりました。



## 研 修 会 予 定

平成26年3月15日(土)

「学校心理士にとってコミュニティ・アプローチとは」

明治学院大学

名誉教授 井上 孝代先生

会場 林野会館 14:00～16:00

この研修会では、コミュニティ心理学を基礎にコミュニティ・カウンセリングについて、特に新たにアドボカシーの活動に焦点を当てて学ぶことを主眼にしています。それを通して、学校心理士のコミュニティ・アプローチへの気づきと知識を身につけるとともに、この分野での研究能力・実践能力を高める機会にしたいと考えています。

3月15日(土)は、学校心理士会東京支部の総会があります。総会への参加もお願いしたいと思います。

会場 林野会館 総会開始時刻 13:00

## 編 集 後 記

学校心理士の多くの方々は、日々学校現場で様々な取り組みを行っていることと思う。日常の取り組みの中で、より良い手立てを工夫されながら対応を進めていることとも考える。しかし、社会状況の変化、学校への様々な要求・要請、援助ニーズを持つ児童・生徒へのリアルタイムでの対応等、時には困難さを伴うことも多い。

このような時こそ学校心理士の専門性をいかす機会となる。個に対応するだけでなく、集団へのアプローチを行い、環境調整の視点を持った取り組みが援助ニーズに応じることともなる。石隈先生が提唱されている「みんなが資源 みんなで支援」というチーム援助の発想が学校システムにいかされることが求められている。

また、取り組みの結果を「日本学校心理士会年報」に投稿してほしい。実践者であるとともに、研究者の立場を意識した取り組みが活動の質を高める。常に研究の視点を携えることが、今後につながると思うのである。

さて、今回のニュースレターでは各ブロックの取り組みを紹介したいと思う。紙面を通じて、ブロック間の交流ができれば幸いである。

(井)